
ロストガール

守利上 響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロストガール

【Nコード】

N1134A

【作者名】

守利上 響

【あらすじ】

守利上響は高校二年生。ある研究所に巻き込まれ、次々と自分の本当の正体を知っていく事になる。本当の自分はどれなのか、そして自分のせいで人が相次いで死んでいく……。それを仲間と自分みんなの力で乗り越えて行く。

プロローグ（前書き）

なかなか長いお話になってます。飽きずに読んでいただけるとありがたいです☆

主人公と私の名前が同じなのには特に意味は無いです。

プロローグ

空は暗く、雨が降っている。泥だらけの地面はぐちゃぐちゃで、今にも滑って転んでしまいそうだ。

ここは深い山奥。崖がそこら中にある。そんな中を由紀は必死に走っていた。

止まれない。止まってはだめ。止まったら確実に殺される！！！！息を切らして走る由紀の後ろを黒い影が三つ追いかけていた。

「まて！！！」

男たちは三人とも手に銃を握っている。それで由紀を殺すつもりだ。男たちも必死で由紀を追いかけている。

「あ、、、」

由紀は足を止めた。暗くてわかりにくいけど、ここから先は崖になっていてもう進めない。落ちたらひとたまりも無い。

絶体絶命のピンチである。

「もう逃げられないよ」

三人のうちの一人が前へと出た。その男の右手にしっかりと握られているものの先は、由紀に向けられている。

由紀は意を決して男たちのほうに振り返った。由紀の手にもその男と同じ物が握られていた。

「へえ、情報だけじゃなく拳銃も盗んできたわけか」

由紀はその銃口を男の右目に向けた。

もうこれは一種のかけである。

激しい雨音がその場の四人を打ちつける。視界もあまりよくない。由紀にとっては不利だ。

二人の引き金がゆっくりとひかれる、、、

激しい銃声が辺りに響き渡った。

男の放った銃弾は、見事に由紀の左胸へと入っていった。

その勢いで由紀は後ろの崖に足を滑らせ、落ちた、、、

「やりましたね、拓馬さん。」

後ろで事を見守っていた男のうちの一人が言った。

「う、、、」

拓馬は右目を押さえ蹲った。

「拓馬さん?!」

二人は拓馬に近寄った。

「くっ、、」

拓馬の右目からは真っ赤な液体が流れ出ていた。由紀の最後の努力の結晶とでも言おうか、その血は雨と混ざり、濃度の低い血となつて拓馬の手と顔を染めた。

プロローグ（後書き）

第二部も絶対読んでください☆

過去（前書き）

過去

「守利上さん！」

後ろから声をかけられ、響ははっとして振り返った。最近遅くまで勉強しているせいか、学校にいるときは眠くて眠くてしょうがないのだ。

（うげっ、、、）

響を呼んだその声の主は中年親父・・・もとい我が校のベテラン理科教師である林下正武だった。

「何度も言うようだが化学部に入る気は無いのかい？」

またか、と響は溜息をついた。

「ほんとあたしも何度も言うようですが、すいません。」

響は軽くあしらう様に言った。この高校に入学してから何度言われた事か。しつこいったりやありやしない。

「どうしてもだめかい？君の頭脳が必要なんだよ。」

（このおやじ、、、何度もしつこいんだよ！）

「我が校一の秀才である君に入ってもらえると顧問の私も鼻が高いのだが、、、」

「すいません。」

「そうか。まあ、一応考えておいてくれ。」

林下はいかにも、といった感じの理科教師で、白衣はもうトレードマークだ。響には不評だが、見た目は渋めのおじさまで、他の生徒には人気がある。

「はあ。」

もううんざり、と言うくらい断ってきた。部活なんてものはやりたいたいだけやればいい。響はその場を去った。丁度帰ろうとしていたところをつかまってしまったのだ。

「化学部・・・か。」

もうすでに下校して誰もいなくなってしまったただっぴろい廊下を

一人で歩いていた。

この学校は私立校で、かなりの進学校である。校内の環境や設備も充実していて、学費も高い。しかし、響は学費免除の特待生である。校内一は当たり前。全国一ですら当たり前、な頭脳の持ち主なのだ。自動ドアから校舎の外に出た。そしてふと校舎の二階を見上げた。

「林下、、、」

二階の窓ガラスからこちらを見ていた。

「やめてよ、気持ち悪いなあ、、、。」

響はそそくさと、校舎から離れていった。

化学部という名の裏、何かとても危険な事をしているらしい、、、という噂がある。それが何なのかはわからない。ただその噂がひっそりと流れている。現に、部員の一人が何らかの理由で部活中発狂し、学校を辞めた。詳しくは知らないが、薬品の研究をしているらしい。

響は小走りで帰った。

学校の外に出てしまえば響も普通の女子高生だ。もともと見た目はその辺にいる女の子達と大差ない。栗色の頭にミニスカートにルーズソックス。特待生になるときに邪魔だった栗色の髪の毛は地毛だ。父親も母親も理系の人間で、今は違うが、以前はどこかの研究所で働いていて、そのとき響を妊娠した為に化学反応か何かで、お腹の中の響に影響してしまったのではないか、、、と両親は言っている。響には妹がいるのだが、その妹も同じような環境で生まれてきたはずなのに妹は何も変わったところは無い。それが少し気になるころなのだ。

「なーに怖い顔してんだ？」

ひよこつと堀の影から現れたのは同じクラスの青崎なずなだった。

「なずな君。」

「まーた林下につかまってただろ。」

なずなは冗談混じりに言った。

響は黙ってなずなに冷ややかな視線を送った。その事については触

れて欲しくないのだ。そのまま歩き出そうとした。そのとき・・・
一台の車がスピードを上げてこちらに向かってきた。

(なんか、不自然、、、)

なずなが振り返ってその車に気づいた。

「来たか、、、」

「へ・・・?」

車は急ブレーキをかけて止まり、中から何人か男が出てきた。その男たちはゆっくりとこちらの方へと近づいてきた。

「逃げるぞ。」

と、なずなが響に耳打ちした瞬間・・・

「うわっ・・・ちよっ・・・」

なずなは響の腕を引っ張り、男たちから逃げる様に走り出した。この周辺は高いビルが建ち並んでいて、人通りが多い。人を掻き分け掻き分け走っていく。

「何!? 何なの!?!」

何がなんだかわからないまま、引っ張られるままに走った。

「訳は後で話す!とにかく今は走って!!」

そんな事を言われても、響は100mを20秒で走る人間だ。なずなは早い、響が足を引っ張っていて速く走れない。おまけに今は学校帰りで重たい鞆も持っている。

みるみる男たちとの距離は狭まってくる。

「しっかりつかまって!」

「へ? うわ!!!!」

いきなりなずなに腰の辺りを抱えられ、そして・・・

「な、何だ!?!」

追ってきた男たちは口をぽかんと開けて上の方を見ている。

響となずなはある廃ビルの屋上にスタツと着地した。

「な、な、な~~~~!?!」

響は驚きのあまり声が出ない。驚く事に、今二人のいる所の数メートル下の地面をなずなが蹴ったとたん、宙に跳び、今いるビルの屋

上に着いてしまったのだ。

「大丈夫、帰って行った。」

なずながビルの下を覗きながら言った。

(な、なんなわけ?!)

響はその場に座り込んでしまった。なずなはゆっくりと響の前に座った。

「ってわけ。」

「・・・ってわけ???」

どうゆう意味だろうか。何故自分がこんな事に巻き込まれなければならぬのか、そして何より一番気になるのがなずなのジャンプ力である。おかしい、、聞きたい事は山ほどあったが、言葉が出ない。

「つまり、守利上は狙われているってこと。」

一瞬目が点になった気がした。狙われている・・・?自分が?さっきの男たちに?

「狙われているって、い、命を???」

「いや、違う。」

なずなは即答した。命が目的ではない。命以外で響が狙われる理由と言ったらもうアレしか無いだろう。

「頭だよ。」

「頭・・・?」

やっぱり、と思うが何故響なのだろう。そりゃ確かにこの学年、高校二年の中では全国一位かもしれないが、もっと年上の、大学教授とか、若くても大学生とかいるはずだ。なのに何故響なのか・・・とりあえず、話の整理をしようと、ひとつなずなに質問した。

「なずなくん。」

「ん?」

「何でそんなにジャンプできんの?」

一瞬なずなの顔が曇った気がした。何か変な事を言ってしまったのだろうか。

「あいつらの研究のせいさ。」

「研究・・・？」

当時、俺はまだ中学生だった。親は母親しかなくて、父親は俺が生まれる前に死んだって聞いてた。母親は、週に二回ほどパートに行くだけで、後はほとんど家にいた。だけど極普通の生活を送ってたんだ。今思えばすごい不思議だけど、生活に不自由はなかったんだ。

そんなある日、俺にとっての地獄に連れて行かれた。ある研究所に・・・

「では、息子をよろしくお願いします。」

なずなの母はそう言って部屋を出て行った。部屋には残されたなずなど研究員らしい女性がいる十畳くらいのこの部屋はどこもかしこも真っ白で、壁もドアも天井も、なずなど研究員が腰掛けている椅子もテーブルも白だ。おまけにこの部屋には窓が無く、ものすごい圧迫感を感じる。

「じゃあ始めましょうか。私は研究員の滝嶋里子といいます。よろしく。」

里子にはこつと笑うと軽く頭を下げた。なずなも慌てて頭を下げる。「これから何問か質問していくから本当の事だけ答えてね。」

と言うと、今まで膝の上においていたファイルをテーブルの上に開いた。

「なずな君は部活とか入ってる？」

「え？・・・あ、はい。陸上部に・・・」

里子はなずなの答えをどんどん書き込んでいく。

「そう、じゃあ、彼女とかはいる？」

「え？・・・い、いや、えっと、いませんけど・・・」

など、百問ほど聞かれた。全ての質問に答え終えた後、今度は普通のフロアリングの部屋に案内された。そこには同じ年位の少年と少女が、中央のテーブルに向かい合って椅子に腰をおろしていた。

「共くん、由紀ちゃん。新しく仲間が増えたよ。仲良くね。」

里子はそういうと、さっさと部屋を出ていってしまった。

「あ、あの・・・。」

二人とも雰囲気的に近寄りがたい感じがした。なずなはどうしたらいいのかわからず、その場に突っ立っていた。

「よろしくね。青崎なずな君だよ。私松尾由紀。」

と言って由紀はなずなに明るく接してくれた。

「あ、よろしく。」

「おれ、館村共。よろしく。」

と、共も一転して明るくなった。さっきの重苦しい雰囲気は何だったのだろうか。

「座りな。」

と言って、由紀は使われていない椅子をなずなに勧めた。廃りはまた一転して真剣な顔になった。なずなは少しためらいながらも、しっかりと足取りで二人に近づいていった。

「はあ・・・」

どこからともなく溜息が漏れた。

「また増えた・・・。うちらみたいな奴が・・・。」

由紀は頭を抱えた。その声は微かにかすれていた。

「とうとう明日か・・・。」

共も口を開いた。だが、なずなには何の事だかさっぱりわからない。

「え？何にも聞かされてないの？」

「う、うん・・・？」

「そっか・・・。」

由紀も共も黙り込んでしまった。なずなにはどうしていいのか解らない。ただじっと、テーブルの中央を見つめていた。

なんて静かな部屋なんだろう。床のフロアリング以外はこの部屋も

真っ白だ。真っ白なこの空間、外は研究所の人たちでがやがやしているはずなのに……。おそらく防音にでもなっているのだろう。

「ん？」

三人が同時に反応した。どこからともなく、ウィーンと言う機械的な音が聞こえてきた。三人は立ち上がり、辺りを見まわした。すると、天井から一枚のスクリーンのようなものが降りてきた。下まで行くと、ガシャンという音を立ててそれは止まった。

ある映像がスクリーンに映し出された。

「か、母さん！！」

そこに映し出されたのは、なずなの母親とさっきまでなずなと話をしていた女性研究員の滝嶋里子が、どこかの部屋で話している場面だった。

「お願いします。」

スクリーンに映されたなずなの母親の声だった。彼女は立ち上がり、里子に向かって言った。

「最後に……。なずなに会わせてください！！」

里子は表情を崩すことなく黙っていた。

「今まであんた達のためにあの子を育ててきたのよ！！ たった一人で！！ 最後に関わり一回くらい会わせてくれてもいいじゃない！！」
「なずなは口が利けなかった。あの温厚でおとなしい母親が里子に対して怒りを露にして怒鳴っている。息を切らし、小刻みに震えているのがわかる。」

里子は目をとじたまま言った。

「わかりました。なずな君を連れて参りますので落ち着いてください。お茶でも飲んで待っていてください。すぐ連れて来ますので。」
里子は立ち上がり、やはり無表情のまま静かに部屋を出て行った。
由紀と共はスクリーンをにらむ様に見ていた。次に起こる出来事が全てわかっているかのように……

部屋に残されたなずなの母親は、椅子に座り直すと、手元にある湯のみを手に取り口に運んだ。

「うっ……。」

何が起こったのか解らなかった。スクリーンに映し出された自分の母親が両手で口をふさぎ、床に膝を付いた。見る見るうちに母親の顔は青ざめて行き、苦しそうに荒い息をしている。口をふさぐ手は吐かれた血で赤く染まっていた。その血は腕まで流れていた。

「なずっ……」

なずな……。そう言おうとしたのだろう、母親はそれからもう二度と動く事の出来ない身体となってしまうた。なずなの間接的な目の前で死に至ってしまったのだ。

「母さ……」

はつきりと口に出す事が出来なかった。自分の母親が目の前の大きな壁で死に絶えたのだ。いや、これはただの画像に過ぎない。そう、リアルに忠実に従っただけの映像かもしれない。母親と里子がグルになって自分を脅かそうとしているのだ……。なずなにはそうしか考えられなかった。

「なずな君……」

そう呼ばれ、なずなははっとして顔を上げた。その時初めて自分の目から涙が流れている事に気づいた。

「あ……」

由紀と共の二人は真剣な眼差しをなずなに向けている。なずなもそんな二人に同調して見つめる。

大きなスクリーンはまた、元の様に、機械的な音を立てながら天井へと入っていった。そして部屋は何事も無かったかのような静けさで覆われた。

「青崎君。話すわ、全て。」

由紀が子の重苦しい雰囲気割った。

「全てって……」

三人は椅子に座り直した。共は黙っていた。この事については由紀が話してくれるらしい。目をしっかり開き、大きな瞳で共となずなを見た。

ふと気がついたが、由紀も共も服が白で統一されていた。由紀の方は白の少し厚手のハイネックのワンピースで、左の胸元には原色の赤に近いくらい真っ赤な色をした十字架のブローチを付けていた。共も上下白く、上はフード付きのトレーナーだ。首に赤いスカーフを巻いていた。そして二人とも白いスニーカーをはいている。この真っ白の中に赤い刺し色の組み合わせは一体何なのだろうか。

由紀は腰ほどもある長い髪を邪魔そうに後ろに流した。

「ここがどんな研究をしているか知らないわよね？」

知っているはずが無い。なずなは何も聞かされずにここにやって来たのだ。もはやその母親はどこにもいやしないが……。

「そうよね。私達も最近知ったばかりだし。」

由紀は泣きそうになっていた。少し目を赤くして涙が出るのをこらえていた。

共はそれを心配そうに見ていた。そして由紀の肩にそっと手を置く。どうやら見ている限り二人は友達以上の関係らしい。必要以上に共は由紀を気遣っている。

由紀は、大丈夫、という様に共を見た。なずなはそんな二人の間にはさまれ、少し複雑な思いに駆られた。

「ごめん・・実はこの研究所は、超能力の研究をしているの・・・」

「なずなは耳を疑った。」

由紀はかすれた声で言った。

「超能力だかなんだか知らないけど、何で私達が・・・。」

もう少しで本当に泣き出しそうなくらい由紀の声は震えている。これは共でなくても手を差し伸べたくなってしまおう。

「ごめん。ほんとごめん。泣くつもり無かったんだけど・・・。」

「とうとう由紀は泣き出してしまった。声を殺して苦しそうに泣いている。共はそんな由紀の背中をさすった。なずなは由紀の泣く理由がわからなくて気まずそうに二人を見ていた。」

「大丈夫、大丈夫だよ。まだ死ぬって決まったわけじゃない。」

死・・・？誰が？由紀か共か・・・俺か？俺達か・・・？

「どうゆう事だよ。死ぬって・・・。」

あまりの事の重大さに何故か逆に冷静になって話が出来た。
相変わらずのこの白い空間は静かだ・・・。今外はどうなっているのだろうか。今何時なのかもわからない。しかし、ここに来てからまだそんなには経っていないはずだ。推定午後五時、というところだろう。

「俺達、明日死ぬかもしれないんだ。」

「えっ・・・。」

さっき実際に自分の母親の死に様を目の当たりにしたからだろうか死と言う言葉が異常になずなの心に重く押し掛かってきている。じわじわとなずなの身体全体にそれが広がっているのが感じられた。まるで苦しさゆえの荒い息遣いを楽しんでいるかのような視線、若しくは手足の指を一本一本死なない様に死なない様にともぎ取られていくような重くて苦しい恐怖感がなずなを襲う。ゾクゾクっと冷たい空気が首筋をかすめた。それでなずなははっとして我に返った。知っているはずも無いが、死と言うものがどういう物だかわからない。死んだらどうなってしまうのだろう。神話や漫画の様に天使になったり幽霊になったり天国や地獄に行ったりするのだろうか・・・。

「君のお母さんが言ってただろう。」

「母さんが・・・？」

何の事だかさっぱりわからなかった。母さんが何を言っていたのだろうか。そんな事気が動転して置いて覚えているはずが無い。

「あんた達の為に・・・。」

由紀がボソツと言った。その声に貼りは無い。

あんた達の為に・・・？

そう言えばそんな事を言っていたような・・・

「俺達は、明日ここで作られた超能力の薬を飲まされる。そのために連れてこられたのよ。」

由紀は下を向いて言った。

「まだ、まだ他に沢山いたの……。私達と同じように……。五十人くらい……。私の友達もいた。」

由紀はまだ赤い目をこすっていた。

「みんな死んだ……。。」

由紀はそつと目を閉じて強く結んだ。

「みんな……。みんな死んじゃったの……。殺されたのよ！……。研究所に……。！」

砕けるんじゃないかと言うくらいきつく歯をかみ締めていた。

「実験は全て失敗。全員死亡。恐らく俺達も……。。」

共はその先を言わなかった。言いたくなかった。

ただ実験が成功する事を祈るしかない。成功したとしてもその後どうなるかわからない。だが今はともかく明日を過ぎても自分の命が繋がっている可能性に賭けるしかない。

今はそれしかないのだ……。

過去（後書き）

お読みくださってありがとうございます☆

逃走

とうとうその時が来た。三人は昨日とは違うが、また全体的に白い部屋につれてこられた。

今、三人の目の前には白く丸いテーブルがあり、その上には、薄い紙の上に置かれた小さな錠剤と、その薬を飲む為の水をグラスに半分くらい入れた物があった。これが由紀と共の言う超能力薬なのだろう。

「これを飲んで下さい。心配しなくても大丈夫。ただの栄養剤みたいなものだから。」

うそをつけ。にこにこ笑顔を振り撒いて言ったのは、昨日、なぜに質問をした里子だった。

どうか、どうか薬が成功しています様に・・・

三人の心の中はそれでいっぱいだった。

共がまず最初に薬を手を取った。それを見て由紀となずなも薬を手にした。

本当に恐ろしい気持ちでいっぱいだった。これを飲んで生きていた者はいない。その中に自分達も入ってしまうかもしれないという気持ちで薬を飲むのを躊躇っている。

何故自分がこんな目に合わなくてはならないのか・・・まだ十四年とちよっとしか生きていない。たった十四年・・・

ごくっ

三人は思いきって薬を飲み込んだ。

薬のせいではなく、精神的に失神しそうになった。目が少し回っているのに気づいた。相当神経を張り詰めていたのだろう。由紀と共も同じ様だった。

「ありがとう。もういいわよ。部屋に戻って。」

里子はそう言々と部屋を後にした。

「行こうか・・・。」

共が言った。

三人はとぼとぼとその部屋を出て行く。部屋を出ると、目の前に研究所のロビーが広がった。そこはとても騒がしく、白衣の人々が沢山いた。しかし三人にはあまり関心が無く、目の前はほとんど闇に近かった。

「あなたたち・・・実験の。」

と、ふいに後ろから声をかけられた。

「大丈夫？気分でも悪い？」

死ぬか生きるかの瀬戸際に気分が言い訳が無い。

声の主は女の子だった。それもなずな達と同じ年くらいの・・・。その子も他の研究員同様に白衣を羽織っていた。この子も研究員なのだろうか。

「誰？」

由紀が恐る恐る聞いた、彼女は笑顔で答えた。

「私、響。一応この一員よ。大丈夫、心配しないで。今回は絶対死なない。効果は現れるか解らないけど死にはしないわ。」

「え!？」

いきなり現れて今回は死にはしないと言われても現実味が無い。一体どうゆう事なのだろうか。

「ここじゃまずいわ。きみ達の部屋で話そう。」

響は無理やり三人を昨日の部屋に連れて行くと、外に誰もいないことを確認し、静かにドアを閉めた。

「ふう。」

響はドアに寄りかかっている。

三人は訳のわからないまま椅子に座らされた。三人とも困惑顔で見詰め合っている。

「どう言う事なの？」

由紀が話を切り出した。

響は三人に近づき、テーブルの上にそっと手をついて言った。

「あなた達は死なないわ。今回の実験はきっと成功する。」

その瞳には自信があふれていた。本当に成功するのだろうか。本当に自分達は死なないのだろうか。

「死には至らないはずよ。だって、今回は私が作ったんだもの。」
「え!?!」

どう見ても同じ年くらいの普通の女の子にしか見ないが、この少女が薬を作ったと言う。到底信じられない話だ。

「嘘だと思ってるでしょ。でも本当の話。今までは私以外の研究員が作ってたんだけど、今回は私の薬が出来たから。」

響は呆然としている三人を尻目にどんどん話し続ける。

「自分で言うのもなんだけど、私めっちゃめっちゃ頭いいのよね。実を言うともう大学出てるし、アメリカのなんだけどね。十歳のときだったっけなあ。IQは300くらいあるとか無いとか。」

「え!?!」

信じられない……。とんだ天才少女に出会ってしまった。

三人は口をぽかんと開けたまま呆然としていた。

「ま、とにかくその薬は大丈夫だから安心して。」

「安心して……。」

調子を狂わされる。さっきまでの緊迫感は一切なんだったのだろうか。三人は顔を見合わせた。

「ふざけんなよ!」

バキッと言う音とともに共は立ち上がった。バキッという音は共が思いつきりテーブルを叩いた音だ。

なんなんだこの研究所は……。人を人とも思わない、人の命を何だと思ってるんだ……。そう怒鳴りたかった。

が、何故か由紀、なずな、響の三人の視線は、共の足元にあるガラガラと音を立てて崩れて行ったものに向けられていた。共は足元を見た。

「げ……。」

「成功……?」

成功……。そんな言葉が響から聞こえた。

ガラガラと音を立てて崩れたものとは、元はテーブルだった。共は一瞬にして目の前のテーブルを破壊してしまったのだ。

まだ由紀となずなは呆然としていた。そんな中、響はゆっくりと共の方へと近づいていった。

「うわっ」

響はいきなり共の体に触り始めた。

「だまって、今調べてるから。」

響の目はさっきと違って真剣だった。吸い込まれそうな目だ。共はそんな響の目に恐怖さえ覚えた。

「服脱いで。」

「は？」

響は白衣のポケットから聴診器やら何やらルーペのような物などをどんどん出している。

共を見た。

「服脱げっつーの。体の変化とか調べるから。ああ、私の事は医者だと思ってくれていいわ。」

「な、何言って……。」

「早くしてよ。あ、全部ね。」

共は青ざめた。ここで脱げと！？由紀やなずなのいる前で！？

「ちょっと、何突っ立ってんの。私以外の人にやらせるわけにわいかないのよ。それに、私以外の人だったたら変な趣味持ったような兄ちゃんとか男の子大好きなねーちゃんとかぐらいしくないわよ。いいの？それでも。あんた綺麗な顔してるから何されるかわかんないわよ。」

響は脅す様に言った。

「で、でも……」

共は半泣きになりそうになりながらちらっと由紀の方を見た。由紀はそれに気づき顔を赤くした。

「ああ、そっか。じゃあ……」

ボタン……

由紀となずなは顔を見合わせた。二人は響きに部屋の外へと出されてしまったのだ。ドアに耳を付けて中で何が起きているか探ろうとしたがまったく解らなかった。

しばらくたってから、静かにドアが空けられた。

「いいよ。もう入って。」

響が顔を覗かせた。二人は恐る恐る部屋の中へと入っていった。共はどうなったのだろうか。

「共? ? ?」

由紀は部屋の隅で小さく蹲っている共を見つけた。ちゃんと服は着ていた。

なずなと由紀はゆっくりと共の方へ近づいて行った。共は放心状態に陥っているらしく、二人に気づかない。

「共! 共! !」

由紀の何回かの呼びかけで、やっとそばに二人がいる事に気づいた。顔は青く・・・いや、それを通り越して白くなっている。

「ちょっと! 共に何したの! ?」

響は平然とした顔で『ただ調べただけよ。』と言った。

ガコン・・・

「なに! ?」

鈍い音がした。何事だと三人は音のした方を見た。

「だおおおおっ。」

「な、何やってんの?」

由紀が言った。

なずなは部屋の奥の壁の前で小さく小さく蹲っていた。そして振り向いた。その目には大粒の涙が溜まっていた。

「いってー・・・俺も出来るかもって思って思いつきり壁殴っちゃまった・・・。」

右手の痛みを必死で抑えている。相当強く殴ったのだろう、右手は真っ赤に腫れていた。痛いにきまっている。『大丈夫?』と声をかけながら由紀が近寄ってきた。そしてその手に触れた。

「うわゝ・・・痛そゝ。」

「痛いよ。あれ？」

「どしたの？」

「痛く無くなったけど・・・」

「！！」

響がその言葉に反応して近づいてきた。

「手、見せて。」

響は無理矢理なずなの右手を掴んで自分の方へと引き寄せた。

「いてっ・・・」

「痛くないんでしょ？」

「お前が引っ張ったからだろうが！！」

なんて自己中な奴だ。なずなはむっとしながらも手は一応響に預けた。

「治ってる・・・何で・・・。」

響ははっとして顔を上げた。その響の視線の先には由紀がいる。

「・・・再生・・・能力？」

「・・・わ、わたし？」

由紀は自分を指差して言った。その顔は硬直している。

響の唇の端が笑った。由紀の背中に悪寒のような物が走る。ま、まさか・・・

「はい。男の子二人はとっと出てってね。」

今度は共となずなが部屋の外に出された。

「なずな、お前には俺達の気持ちはわからないよな・・・。」

共はドアの反対側に体をあずけている。顔色は幾分か良くなったが、まだ体に力が入っていない様だった。

「何？何されたんだよあの女に。調べるだけとか言っていなかった？」

「言えない・・・。」

言えないくらい恐ろしい事をされたのだろうか。あの女に・・・。
ガチャ

一体何をされたのだろうか。地獄の番人響に一枚一枚爪でも剥がされていったのだろうか。それともムチでビシバシ叩かれ皮を剥がされ、その上から酢でもかけられたか・・・まさかそんな事をされたわけではない。なずなの身体を全て調べただけなのだ。そう・・・全て・・・

「ハイ、終わり。じゃ、服着てどうぞ。」

なずなは呆然と立ち尽くしていた。

（う、うそだろ・・・。）

「ほらほら、早く着て！見苦しい！」

（み、見苦しい！？ふざけんな！！）

しかし、今は文句を言っている場合ではなかった。響が今にもドアを開けようとしていたのだ。

「うわっ。まっ・・・。」

ドアの向こうには由紀と共がいるはずだ。今ドアを開けられたら大恥をかく事になる。なずなは急いで服を着た。

「なずな・・・大丈夫？？」

危機一髪・・・。

「みんな座って。」

響は三人を椅子に座る様目で促した。

三人は大人しくテーブルだった物体の周りに無造作に置かれている椅子に腰を落ち着かせた。

「ねえ、あなた何なの？」

由紀が少しおびえた様に言った。

「私？私はこの研究所の一人娘。みんなと同じ中二よ。つい最近お父さんが所長になったの。それまでの実験はお父さんが行ってたんだけど、今回からは私に任されたのよ。」

と、響は説明した。

「それでね、・・・。」

響は静かに目を閉じ、また開いた。

「あと一時間くらいで自由時間が終わるわ。そうしたらあなた達は

特別監査室に入れられて、実験のために観察される。つまり監禁ね。ばれるわ、この力が。ばれたらどうなるか分かる？」

「どうなるの・・・？」

由紀が聞いた。とても重たい空気に包まれている。四人とも真剣な顔つきだ。

「世界征服とでも言うておくか・・・まあつまりはそうゆうことよ。あなた達の力がばれたら悪用されるに決まってる。共は戦力。由紀の再生能力は怪我をした人々を回復させる力がある。なずなはまだ分からないけど・・・。」

「ね、ねえ。一つ聞いて言い??？」

「何？」

「どうして、私と今日の力が違うの？私達が飲まされた薬って何なの？」

由紀はさすがのように聞いた。

「あなたが飲んだ薬は、体のどこか一部分だけ強化させる薬なの。人には個人差があって、自分の潜在能力がもっとも出やすい個所に効果が現れる。」

「そうなの・・・。」

響はゆっくりと部屋の奥へ歩いて行った。そして壁の前に立ち、軽く壁を叩いた。何かを確かめている様だ。響の顔が微かに笑った。

「共、あんたならこの壁壊せるわよね。」

「え？」

三人は驚きの顔で響を見た。壊す？この壁を？壊してどうする？

「この壁の向こうは丁度人が滅多に通らない場所なの。」

「何言ってるんだよあんた・・・。」

共は立ち上がっていった。

「逃げよ。私と一緒に。」

三人は自分の耳を疑った。

「な、なんだって!?!お前ここの娘なんだろ!?!逃げるって・・・。」

「

「私は悪に染まりたくない。ここの研究所は超能力の研究意外にもいろいろ法に触れてる事してんのよ。銃やドラッグがここの倉庫には沢山ある。」

「な……。」

「もちろん私はドラッグなんかやってないわよ。私に薬なんか使ったら大切な頭脳が研究所から消える事になるからね。」

「そう……。」

急に静かになってしまった。あと45分位で三人は自由がきかなくなる。その前に何とかしなくては……響はそう考えていた。

「あなた立ちの命だって危ない。死にたくないでしょう!?! だから、一緒にここから逃げよう! 今しかないのよ!」

響の瞳には三人がきっちり映し出されている。今しかない、逃げるなら今しかないのだ。

「できる事ならこの犯罪を世間にばらしてやりたい……。」

「……。」

生か死か、いや、生き残れる小さな可能性か、生きて犯罪に手を染めるか……。だ。この二つのどちらかを選択しなければならぬ。

由紀は、なずなは、共は、どの道に進むのか……。

「信じていいのか? お前の事……。」

共が声を発した。

響は共の瞳を見つめた。その視線は真剣その物だった。

「当たり前じゃない。」

三人は背筋を凍らせた。何だ? 何か響の言動に恐怖を感じた。特に何を言ったわけでもないが、気迫の強さに圧倒されたのかもしれない。

「信じていいんだな。」

共は確かめる様に言う。

「もちろん。」

残り三十分。この自由時間が終わるまでにこの研究所から脱出しなくてはならない。

「由紀となずなはどうする？俺は響と一緒にここを出る。」

二人は強く頷いた。二人とも共と同じ気持ちだ。

「三人とも体に異常は無かったわ。だけど力を使いすぎないでね。後々、何が起るか分からないから。それと、もし逃げ切れても、いつ居場所を突き止められるか分からない。あまり目立った生活しない様に。私は残っている薬を持って逃げる。もし私が捕まってもあなたは逃げるのよ！？分かった！？」

「な、何で。」

「私は捕まっても殺されはしない。だけどあなた達は違う。ああ、もう時間が無いわ。私は倉庫から薬を持ってくる。それまでここで静かにしてて！」

「ごめん！！遅れた！！」

響は息を切らして部屋に入ってきた。白いビニール袋に入っているものを抱えている。恐らく例の薬だろう。両手いっぱい抱えている。

「共！お願い！」

「オッケー。」

「ここ二階だから降りるとき怪我しないようにね！」

「うそ！」

「本当。」

二階だと！？二階から飛び降りろと！？骨折までは行かなくとも怪我の一つや二つするのではないか・・・

「いっくぞお！！」

「おしゃ！！！！」

いつのまにか四人の心は一つになっていた。ここから逃げ出すと言う同じ目的を抱えた青少年少女達は心を一つにし、今しも飛び立とうとしていた。

「おりゃあああああ！！！！！！！！」

バキッガラガラガラッ・・・

そんな音だっただろうか。もうすでもとは壁だった塊は外の地面に転がっていた。

「つてゝ・・・。さすがに壁はきついな・・・。」

「大丈夫!? あたしが・・・。」

由紀は共の手の痛みを止めようとした。が、共はそれを断った。

「こんぐらいヘーキだって。力の無駄使いはすんな。」
にっと笑った。

「うん。」

由紀も笑顔を向けた。

「おい。なんかイイ雰囲気になってますけど。」

「ったく、見せ付けないでよね!」

由紀と共は少し照れ笑いを浮かべた。

「ほら! いそご!!」

「うん!」

ぽっかりと開いた壁の穴からは緑が一面に広がっているのが見えた。
この研究所の庭だ。響の言ったとおり誰もいない。

「じゃ、降りるよ。」

まず初めに響が降りようとした。

「ちょ、ちよっと待って!」

なずなが止めた。

（何だ? 何か変だ・・・。足・・・足がおかしい・・・。）

共と由紀は頭の上に『?』を浮かべていたが、響は何かに気づき
なずなを見た。

（・・・ま、まさか。）

「よっ。」

と言う掛け声とともになずなは4 m下の地面へとひらりと降りて
行った。

着地は音を立てず、綺麗に出来た。

やっぱり・・・となずなは確信した。なずなの得た力は脚力だった

のだ。

「なずな、やっぱりそうだったわね。」

「なんだ、わかったのか。」

響の上からの呼びかけにそう答えた。

「えー、何!？」

共と由紀はさっぱり分からずに戸惑っていた。

「こーゆーこと。」

なずなはそう言うと、タンッと地面を蹴った。

「うわあっ。」

「よっと、成功成功!」

なずなはジャンプで再び二階に上がってきたのだ。

「すっげー!」

「やったわね!これ逃げるの楽じゃん!」

「急いで急いで!もう十分しかない!」

「まじで!？」

三人はげつと言う顔をした。

「さーて、行くわよ!死に物狂いで逃げてよね!!!」

「オッケ!!」

四人は飛んだ。これからの幸せを求めて・・・

失われた右目

「俺達は逃げた。逃げて逃げて逃げまくった。・・・そして、見つかった。」

なずなの顔は下向きだった。

「捕まったの？」

響は少し躊躇う様に聞いた。なずなは首を横に振った。そしてまた話し出した。

「俺達は力のおかげで逃げる事ができた。だけど守利上は捕まった・・・。」

「捕まった・・・？」

「ああ、耳にピアス型の発信機がついていたんだ。それで・・・。」
「と言って、なずなは悔しそうに前髪をくしゃっと握った。」

「そして、お前は『本原響』から『守利上響』に記憶を入れ換えられたんだ。」

「!？」

（記憶を入れ換えられた？私の今の記憶は本物ではないってこと？十四年以前の記憶は偽物だって言うの!？）

驚かずにはいられない。目を見開いたまま、呆然としていた。

「信じられないと思うけど。」

響は顔を上げた。不思議とその話を信じている自分がいる。確かに驚いた。驚いた事は驚いたが何故だろう。自分の中で差ほど受け入れられない話ではない。自分自身記憶に曖昧なところが多過ぎると感じていたし、何より、今の両親が何故か、親として見れていなかった。というか、親自体響の事を、自分達の子として見れていなかったのかもしれない。

「本当なのね・・・？」

「・・・ああ。」

なずなは軽くうなずいた。嘘をついているような顔ではない。第一

こんな変な嘘をついても何の得にもならない。事実、なずなの脚力は半端じゃなかった。それを響は体験したのだから、何よりの証拠だ。

「それで・・・。」

なずなは顔を響に向けなおした。

「俺と組まないか？」

「え・・・？」

組む？ 一体どうゆう事だろう。

「あっ・・・。」

ビルの下の方を見ていたなずなはいきなり立ちあがり、手すりにつかまり、身を乗り出して下を覗いた。それに続いて響も見た。数メートル下の地上には何人か人が歩いていた。響には何がなずなを気付かせたのかわからなかった。

「共・・・。」

「きょう？」

共というのはさっきのなずなの話に出てきた少年の事だろうか・・・どこに・・・

「守利上！降りるぞ！」

「え！！！！？」

なずなは今いる場所の反対端に走った。響は後を追う。

「ちょっと・・・待ってよ！」

響はゼーゼー息を切らしていた。

「ちゃんとつかまってるよ！」

上がってきたとき同様、なずなは響を抱えてそのまま下へ急降下した。

「いやあああああ！！！！」

（だめー！！だめなのこーゆーのはー！！！！）

一瞬の出来事だった。二人は着地していた。響はふらふらしながらなずなから離れた。

「だ、大丈夫か？」

「・・・たぶん。」

「行こう。」

「ええ？」

なずなはまた走り出した。ビルの表のほうへと走っていく。響もそれに続いた。

「共！」

なずなはそう言いながら目の前を歩いていた高校生の腕を掴んだ。その男は振り向くと驚いた顔つきになった。

「なずな・・・！？」

館村共だった。

なずなの話によると、現在三人は別々の義理の親に引き取られたと言う事だ。共と由紀は同じ高校に入学し、仲良くやっているらしいが、なずなだけ違う学校に入学してしまったので、連絡が取れなくなっていたらしい。

「なずな！生きてたんだなあ。」

「もちろん！あれからは何も無かった。」

再会できた喜びの反面、共には気がかりな事があり、笑顔を作ることが出来なかった。

「どうした？」

「由紀が、由紀が行方不明なんだ。」

「え！？」

なずなは青ざめた。良からぬ考えが頭を過ったからだ。響も同じ事を考えていた。行方不明と言ったらやはりそれしか考えられない。

「嘘だろう？」

なずなはその場に立ち尽くしてしまった。

「ね、ねえ。あっちの公園で落ち着いて話そう。」

響は二人の男の背中を軽く押す様にして言った。

「え・・・あ、あれ？彼女？？？」

共は今まで響の存在に気付いていなかったらしい。その響の言葉に驚いてなずなの顔をまじまじと見ている。

「ていうか、響だよ。共。あの。」

共は一瞬考えて何かに気づいたように響を見た。

「は！？響って・・・まさか。」

「そう、そのまさか。今はいろいろあって研究所の事は覚えてないんだ。でもさっき一応話はした。」

「そうか・・・。生きてたんだな。良かった・・・」

本当に安心した様に共は肩をなでおろした。少しだが共に笑顔が出た。

信号が青に変わり、三人は反対側の道へ渡った。今の時間は人が多く、ほんの十数メートル歩くだけだったがやけに時間がかかった。共と響はその人ごみをうまくすり抜けて歩いて行ったが、そんな二人の後ろで人にぶつかっては謝り、足を踏まれつつなずなは歩いていた。

渡った道のすぐ目の前の公園に三人は入っていった。公園の中は外の雑踏に比べだいたいぶ静かだ。さっきまで人ごみの中にいたせいか、いつもより公園が広く感じた。自分が何も出来ない小さな人間だと言う事を由紀が行方不明だと聞いて実感しているせいかもしれない。三人とも同じ事を考えていた。

誰が何を言うでもなく、三人は入り口のすぐ近くにあったブランコに近づいて行った。共はブランコを取り囲んでいる柵に腰掛け、響となずなはブランコに乗った。なずなが話を切り出す。

「由紀が行方不明って、どう言う事なんだ？」

かかとを地面につけ、膝を曲げたり伸ばしたりして軽くこいでいる。ブランコなんて何年振りだろうか。響はぼんやりとそんな事を考えていた。はつきりしない意識は足元をせかせかと歩く蟻に向けられている。響はその蟻の行列をじっと見つめて少し足りとも動かない。「一昨日から学校に来なくなったんだ。ただ休みなんだと思ってたら由紀の親から連絡があって、由紀が帰ってこないって・・・。親って言っても義理だけど。俺ら親に研究所の事は話してあるんだ。」

もちろん力の事については多少話を変えて伝えてあるけど・・・。」
話しはなかなか進みそうも無い。共は由紀の行方不明で少しパニック気味だし、隣でブランコをキコキコさせているなずなは頼りにならない。だが話は進めなくてはならない。もしかしたら一刻を争う事になっている可能性もある。とは言っても話を聞かされただけの響では役不足であろう。しかしそんな事を言っている場合ではない。
「その由紀さんって、様子が変だったとか無かった・・・？」
共ははっとした顔つきになった。何か思い出したのだろうか。響を見た。

「なんか・・・二・三ヶ月位前から学校早退したりしてた。本人は最近体の具合が良くないとか言ってたけど・・・。あとよく携帯に電話かかってきてた。誰って聞くといつもはぐらされてて結局誰からか聞けなかった。彼氏かな？とか思ったけどそりゃ俺か・・・だし。」

「オイオイ・・・」

「それと関係ありそうね。もしかしたらその電話の相手、研究所の奴かもしれないし。」

響は冷静に話した。その場で冷静でいられているのは響だけだ。共もなずなも研究所の恐怖を知っているため、気持ちに乱れが生じていた。

「何の為に・・・。」

共がボソツと言った。

「何の為に由紀はさらわれたんだ。何の為に・・・。」

「共、まださらわれたって決まったわけじゃないよ。」

なずなは今にも壊れてしまいそうな共をなだめる様に言った。だが共はその言葉を受け入れなかった。

「いや、由紀は俺に何も言わずどっかに行っちゃもう奴じゃない！」
口調がだんだん強くなってきた。確かに共と由紀の愛情や信頼感の半端ではない事はなずななら嫌と言うくらい知っている。

共は自分を落ち着かせる様に深呼吸をした。

「ごめん。こうゆう時は落ち着かないとな……。俺、すぐ感情的になるから……。」

共はいつのまにか硬く握っていた拳をそっと開いた。

響はふと右の腕につけている腕時計に目をやった。秒針は刻々と時を刻んでいる。午後七時四十六分。響の耳は一定の速さの秒針の音を聞いた。その音に吸い込まれそうになった。

気がつくとその時計はもうすでに五十分を指していた。さっきから四分間ずっと秒針に気を取られてしまっていたのか。由紀の話はどうなったのか。響は時計から目を離し、二人を見た。二人は無言で俯いていた。おそらく何も話してはいないだろう。そしてこのままだと何も解決策は生まれない。響はそう思った。

辺りはもう暗くなっている。周りを見渡すと昼間とは打って変わって違う世界の様に見えた。この公園を照らす電灯は四角い公園の角に一本づつ立てられていた。しかしどれも消えかかっていたり壊れていた。誰も何とかしないのだろうか。確かにここは人通りの多い道に面しているくせにあまり利用する人はいない。

響は二人に帰る事を勧めた。明日また会って話をしよう、と。明日は幸いにも日曜で休みだ。三人は明日の午前十時にこの公園で待ち合わせをした。

「じゃあ、また明日ね。」

三人は公園の前で分かれる事になった。

「じゃあな。大丈夫か？一人で。」
なずなが言った。

「大丈夫よ。じゃあね。」

響はそう言って歩き出した。

「じゃあ、俺も帰るな。」

「ああ、またな！共！」

三人の足はとても重かった……

冷たい夜風に晒されながら響は歩いていた。

「さぶっ……。」

細い路地に入ると辺りは一面真っ暗だった。電灯など一本も無く、古い家がずらっと両脇に並んでいる。ここを抜けてすぐのところに響の家はある。しかしそこまでが大変なのだ。この細い路地は100m程続いていて、人はこの時間全くとっていいほど通らない。もしもこんなところでお〇けなんか出てきたら卒倒してしまうに違いない。まあ、お〇けなんていう非現実的な物を信じてはいないけど……

「やっぱりなずな君に送らせれば良かった。」
ボソッと口の中で言うと、少し小走りでこの細い路地を駆けて行った。

「う……。」

拓馬は目を覚ました。一体何が起こったのか解らず白い天井を見上げていた。我が家……研究所の天井だった。

「いたっ……。」

痛みで初めて自分が目に怪我をしていることに気付いた。包帯をしてあるらしく右の眼に感覚は無かった。その痛みで我に返った。何故自分がこんなところにいるのか、この痛みは何なのか。

拓馬は右の目に手をやった。痛くて直接触れる事ができなかった。包帯はきっちり巻かれている。

思い出した。そう、この右目はあの松尾由紀にやられたのだ。俺はあの雨の日、あの女を殺した。上の命令だった。殺すのは少し躊躇ったが、やらなければ自分が殺されるだけだ。俺は銃口を由紀に向け撃った。それと同時に俺の右目も一瞬のうちに潰されたのだ……。そのまま気を失ってここへ連れてこられたのだろう。あの場所からここまですいぶん離れている。よく助かったものだ。それもこれもこの研究所の佐伯医師のおかげだろう。研究長である父親の正司がとても気に入っている医師だ。佐伯が拓馬の目の手術をしたに違い

ない。

拓馬は寝返りをうとうとしたその瞬間激しい痛みが拓馬を襲った。実際に痛いのは右目だけなのだろうが、全身がしびれのような痛みに襲われた気がした。あまりの痛さに思わず右目を両手で押さえてしまった。余計痛くなるのはわかっていたが、そうするほかにどうすればいいのか分からなかった。額から汗が滲み出てきたが、拓馬には分からなかった。整わない呼吸のせいで声が出ない。声を出せば誰かが来る。動く事も出来ない。拓馬はそんな痛みの中である事を考えていた。

俺の右目は恐らくもう使い物にならないだろう。俺からこの右目を取ったら何が残る？何も残りはしない。研究長の息子といふここでは何の役にも立たない肩書きだけが今の自分を辛うじて存在させている。そうだ、きつとそうだ。役立たずな俺をここの連中が生かしておくはずが無い。

朦朧としている拓馬の耳に話し声が聞こえた。

「どうだ、拓馬の右目は。」

父親の正司の声だった。その声は拓馬の頭の方の壁の向こうから聞こえてくる。

「もう拓馬さんの右目は光すら失っています。」

もう一人、男の声がした。明らかに佐伯医師の声だ。

光すら失っている・・・拓馬はその言葉にはっとして起きあがった。同時にさっきとは比べ物にならないくらいの激痛が全身に走った。だが今はそんなことを気にしている場合ではない。激痛に耐えながら拓馬はゆっくりとベッドから這い出た。足が震えていてしっかりと立てない。話はまだ続いていた。

「では、やはり消す事になりますかね・・・拓馬さんも。このままじゃお荷物になってしまいますから。」

正司がその後に何か言っていたようだが痛みが酷く聞こえなかった。殺される・・・殺されてしまう。このままここにはまづい。ふらふらしながらも部屋のドアノブに手をかけた。心臓は壊れそう

なほど波打っていた。もし、このドアを開けて誰かがいたら……。拓馬の生きる道は絶たれてしまう。

ここはきつと研究所の一番出入り口に近いところにある建物だ。ここも人はあまり近づかない。この部屋が一階であるならば十分にここを抜け出せる可能性はある。

隣の部屋から二人の話が聞こえてきたと言う事は隣の部屋は病室ではないはずだ。恐らく佐伯医師の部屋。というところは一階だ。

拓馬はベッドを挟んで向かいにある窓へと向かった。途中で何度も倒れかけた。そのたびに右目を激痛が襲った。

拓馬はゆっくりと窓を開けた。夕焼けが左目に飛び込んできた。

拓馬の考えは正しかった。ここは一階で、そしてやはりすぐそこに研究所の出入り口が見えた。

これで少し生き延びる可能性が高くなった。痛みを忘れる事は出来なかったが、夢中で部屋を抜け出した。地面に足をつける時にも痛みが走った。いっそのこと、このまま死んでしまったほうが楽なのではないかと弱気な言葉が浮かんだがそれをかき消した。

とにかくまだ明るい時間に出来るだけ遠くに逃げなければ。暗くなれば左目だけでは不自由過ぎる。

汗が後から後から流れ出てきた。それをシャツの袖で拭いながら一歩一歩足を進めていった。だんだん体力も限界になってくる。自分でよく分かった。頭が朦朧として目が霞み、まっすぐ歩くのが難しい。辛い……。きつい……。苦しい……。痛い……。そんな言葉が拓馬の頭の中をぐるぐると徘徊している。今自分が選択した道を止めたくて仕方が無かった。左目には涙が滲んでくる。

どこへ行こう……。行く当てなど無いがどこかへ行かなくては……。

……。そうだ。あそこへ行こう。

拓馬は重い足を引きずって道を進んだ。白いワイシャツが汗でぐしゃぐしゃになってしまい気持ちが悪かった。ズボンもしわくちゃになってしまい端から見たらとてもみずばらしい格好だ。

右目の包帯を引き千切りたい衝動に駆られた。今この状態でこれ以上理性を押さえていられるほど精神的に強くはない。痛くて痛くておかしくなりそうだ。

早く、早く……。あそこへ行けば何とかなるかもしれない。細い路地を抜けた。すでに辺りは暗くなっていて、一軒のオレンジの光が拓馬を迎えた。同時に拓馬の体力、精神力ともに限界を迎えた。足の力が抜け、がくつと地面に座り込んでしまった。そして、拓馬の意識は遠のいて行った。

「何！？拓馬がいない！？」

自分の部屋に戻った正司はがたと音を立てて椅子から立ちあがった。息を切らした一人の男が拓馬が部屋から抜け出した事を告げたのだ。

正司は落ち着こうとそつと手を机の上に置いた。

「所長はなんて・・・？」

「何人か送りました。殺せという命令です。」

男ははっきりとした口調で言った。

正司は深い溜息をついた。

「そうか・・・。」

正司の声は少し枯れていた。心なしか半ば諦めたような言い方だった。

男は失礼しましたと言って正司の部屋を後にした。

部屋には沈黙が訪れた。正司はストンと椅子に落ちると机の上で頭を抱えた。

「くそつ・・・兄貴・・・。」

暗い暗い細い路地を抜けると、オレンジ色の家の灯りが視界に広がった。響はほつと肩を下ろした。

「ん．．．？」

響の家の前に誰かが座り込んでいた。酔っ払いか？響は不審に思いながらその人物に近づいて行った。

「え．．．？」

想像していたより若い男だったので驚いた。見ると、右目に包帯をしている。服もぐちゃぐちゃで、とても普通の人と呼べる状態ではなかった。しかし、右目は隠れているが、綺麗な顔立ちの男だった。

「何．．．この人．．．。」

どいてくれないと中に入れない。少し怖かったが響はその男の体をゆすった。

男はゆっくりと目を開いた。何が起きているのかさっぱり分からないといった顔をしている。

「あ、あれ？俺．．．。」

拓馬はどうか目的地へとたどり着いたが気を失ってしまった。あれからどのくらい時間がたったのだろうか。体がずいぶん冷えている。

「あの．．．。」

拓馬はその声にはっとして顔を上げた。目の前にいる女が存在にやっと気付いた。

この髪の色、この顔．．．。

「ひ、響？」

「え．．．？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1134a/>

ロストガール

2010年10月9日21時05分発行